

# 東アジア世界と

## 倭王権の成立 ①



講演者 元第二経済大学教授 田中 正日子氏

前回は主に『漢書』や『後漢書』、それに魏志倭人伝で有名な『三国志』などを取り上げて、主に2世紀後半から3世紀前半ごろの邪馬台国の時代を考えてきました。

ところが、4世紀の中国史書には、『倭』の記述が見えなくなりました。中国晋王朝の末期に高句麗が朝鮮半島に侵攻して、313年に中国が朝鮮支配のために設けていた楽浪郡に進出しています。楽浪郡は、紀元前1世紀ごろに鉄資源を求めて半島に渡った倭人が漢の武帝に朝貢を始めた所で、その道が断たれたのです。

高句麗の半島進出は、特に朝鮮の部族国家に大きな衝撃を与えました。4世紀中ごろになると半島南西部の馬韓には百濟、東南部の辰韓に新羅、そして南部の弁韓地方は加耶

(加羅)諸国といった3韓国が成立します。これが7世紀末までの高句麗・百濟・新羅の3国鼎立(ていりつ)時代の始まりです。

しかしその間にも、海を隔てた宗像市では、久原瀧ヶ下(くぼらたきがし)も遺跡で朝鮮から伝来したと考えられる3世紀後半(古墳時代初頭)の鉄鋌(てつてい)が出土しています。また沖ノ島の集配遺跡からは4世紀後半代の鉄鋌も見つかったのです。農具や武器などの加工は国内でもかなり行われており、それを作るために鉄を溶かして一定の形にしたのが鉄鋌です。しかし鉄資源は、基本的に5世紀末ごろまで大きく半島に依存していたと考えられます。

では、朝鮮の動向は、列島の倭人社会にどんな影響を与えたのでしょうか。

博多湾岸には、3世紀末から4世紀前半ごろの最大の国際交易港だといわれる西新町遺跡があります。高句麗が半島に進出を始めたころから、ここでは半島南西部の馬韓と百濟の地方勢力

力の土器が、弁韓や辰韓の搬入土器を上回って出土し、渡来人の住居跡も見つかっています。

### 筑紫と出雲が連合、倭王権と距離

また列島内の搬入土器は吉備、播磨、河内、大和、東海地方、それに最も多いのが山陰地方の土器だと報告されています。山陰地方といえば、鳥根県の荒神谷遺跡から出土した銅矛16本のうちの7本は、みやき町の剣見谷遺跡出土の銅矛10本と同じ綾杉文の研ぎ分けがあつて、北部九州製作品だと考えられています。

筑紫・出雲連合位置関係図



ここからは、出雲と北部九州の問題を、8世紀前半に成立した『古事記』、『日本書記』、『風土記』などを参考にしながら特に3世紀末から4世紀前半の畿内政権と出雲や筑紫との関係を中心に考えてみたいと思います。

まず、初代の事実上の天皇については、古事記、日本書記ともに「ハツクニシラス天皇」と表記して、奈良時代に名付けられた崇神天皇だとする所説があります。おそらく4世紀初めごろ、大和地方に畿外にも及ぶ地域支配を執り行う支配者が台頭して、これを初代に考えたのだと思います。

しかし、崇神天皇が出雲の神を調査するために使を派遣したら、神宝を管理する出雲臣の遠祖が「筑紫に往き」留守にしていた。そのため西道に派遣した將軍吉備津彦に殺害させたという説話を注目したいと思います。古事記、日本書記の神統系譜は、出雲の大国主神が筑紫の胸形(宗像)氏が祭る沖ノ島の女神と結婚しているとしていること。そして日本書記の神代巻「書は、朝鮮半島への道中に鎮座する女神を、筑後川南岸の旧三潴郡辺りを根拠地とする「筑紫の水沼君等が祭る神、是なり」とも記述しているからです。

4世紀初頭の出雲と筑紫は、おそらく朝鮮半島との交易に絡んで地域的な政治的連合を形成し、倭王権とはまだ一定の距離をおいていた時期、だろうと考えています。

政治勢力が、その権威で地域集団の交易の先頭に立ち、地域の土器作りにその影響が及んだのではないのでしょうか。

ところで、日本書記は実際は246年を神功皇后摂政46年としましたが、おそらく朝鮮の情勢を調べるために加耶諸国のひとつ、現在の昌原(チャンウォン)にあたる卓淳国(とくじゆんこく)に使者を派遣しています。そこで高句麗との関係で倭国の援助を期待する百濟の使者が、渡海で済むに帰国した話を聞いたのです。早速百濟に向かったのは従者ですが、近肖古王は大歓迎で高価な賜物を託して、従者には鉄鋌40枚を幣(あたえた)といっています。実はこれの史料が、倭王権と百濟王の最初の国同士の交流を示す記述です。

そして3年後の369年には、近肖古王が高句麗の3万人の歩兵と騎兵の大侵略に抗してこれを破ると、太子はその年に「倭王の旨の為に造る」と銘文に記した七支刀を贈ってきます。現在天理市の石上神宮に所蔵されているのがそれです。このころ『倭』の存在は実現していたことがわかります。

(次回に続く)

# あなたもふるさと学芸員

## 「神埼塾」の講演から⑤



375年の朝鮮3国

### 4世紀中ごろには『倭王権』が存在

『出雲国風土記』には、在地神が新羅国の余った土地を引き寄せて縫い合わせたので、国土が広くなったという国引き神話があります。西方にあたる新羅からは、日本海を東に向かう対馬海峡と冬場の偏西風に後押しされた漂着物や舟が出雲の浜辺にたどり着くことが多く、かつて海中に浮かぶ小

島が陸続きの鳥根半島になったという伝承が、新羅と結ぶ神話になったのだと思います。ちなみに現在の日本人の血液A型は、全国民の38.2%で、鳥根県人は42.8%とそれより高く、韓国でも新羅の慶尚南道が42.2%と高く、鳥根県と類似しています。もしかすると歴史的な人的交流の蓄積を示して

### 畿内勢力が

### 集団交易の先頭に

西新町遺跡では、邪馬台国時代の在地系西新式土器が「半島系土器が搬入され始めるころから、畿内の布留式土器に変化している」といわれています。しかし西新町遺跡の国際港は、高句麗の進出で緊張した朝鮮から持ち込まれた物品との交易の場でした。仮に鉄鋌などを求めて渡海すれば、3国抗争に巻き込まれる危険も伴うはず

◎問い合わせ先  
神埼市役所 政策推進室  
☎3710102